

# 汗と涙の異国文化交流記

ほしなもくれん  
星那木蓮

札幌や小樽の雑踏の中を歩くと、聞き慣れない言語があちらこちらから聞こえる。日本語、英語、中国語、韓国語……。ありとあらゆる言語が街中を飛び交うこの街は、いつから外国人だらけの街になってしまったのだろうか。ひと昔前は、欧米からの観光客が大半を占めていた北海道も、いつの間にかアジア系の観光客で溢れ返るようになっていた。外国人を日々見かけることは、観光客に限ったことではない。日本に住む外国人が急増しているため、コンビニや工場、介護の現場など、身近な場所で彼らが働くのを目にするようになった。私は介護職員だが、まだ職場には外国人スタッフはおらず、この問題をどこか他人事のように感じていた。しかし、思わぬ機会から彼らと働くことになったのだ。

それは二年前の初夏の出来事だった。この年の冬に、私は車の車検を控えており、費用として小さく見積っても約七万円が必要だった。日頃から車検用に貯金をしておけば良かったのだがその余裕もなく、今流行りの単発バイトでスキマ時間に車検代を少しでも稼ごうと思いつき、すぐに小樽にあるビジネスホテルの客室清掃員のバイトに応募した。このバイトは日頃から肉体労働をしている私でも、なかなかハードだった。仕事内容は単純作業だったが、とにかく体力とスピードが命だった。たった五時間の労働時間だったが、汗まみれになり、ポロシャツの背中部分が、いつもジットリ濡れていた。ホテルのバイトは本業の関係もあり、なかなか毎日連続でシフトを入れることは出来なかったが、可能な限り、本業が休日の時には働くように応募を重ねていた。ところが、毎日シフトを入れる人もおり、あつという間に仕事の力量に差がついてしまった。誰が見ても私のベッドメイクはスピードが遅く、日増しに悩みの種になっていった。最初は人手不足の中、シフトを入れてくれる私に優しくかったリーダーも、少しずつ仕事の遅さに苛立ちを見せ始め、冷たくあしらうようになってきた。仕事が早い人には、親しげに日常のことまで笑顔で話すのに対し、私には必要最低限の業務の指示のみを、淡々と無表情な顔で話すだけになっていった。バイトを始めた頃は

「暑い中、お疲れさま。またバイトに来てね」

と労いの言葉をかけて、アイスを奢ってくれることもあったのに、それが夢のような出

来事に思えるほど、リーダーと私の距離は離れてしまっていた。毎日、たくさんのお客様をチェックインの時間までに入れなければならないので、リーダーの苛立ちは当然のことではあったが、だんだんバイトに行くことが憂鬱になってきていた。しかし、全ては車検のため。泣き言を言わずに頑張るかしかなかった。

ある日、私がベッドメイクをしていると、リーダーがやってきて

「もう少し手早く仕上げることでできない？ もう何回もうちに働きに来ているよね？」

と少しイライラした口調で注意してきた。私は悔し涙が溢れて下をうつつむいた。かうじて涙をこらえたが、それをベトナム人のグエンさんが、じっとこちらを見つめていた。リーダーがその場を去った後、グエンさんが

「コッチ、キテ！」

とどこかきこえない日本語で突然私の手を引き、まだ新しいシーツが敷かれていない空ベッドの前へ連れて行った。そして

「Look! コウシタラ、ウマクデキルヨ！」

と英語と片言の日本語を話して、テキパキと数十秒でシワ一つない綺麗なベッドを作ってお手本を見せてくれたのだ。私はグエンさんの優しさがじんわりと温かく胸に染みて、嬉しさが込み上げてきた。私も勇気を出して片言の英語で「Thank you」と返事をしてみると、彼女も嬉しかったようで、ニコリと笑顔を見せてくれた。あえて尋ねたことはなかったが、彼女も日本で働き、心無い差別や偏見もたくさん受けてやるせない想いをしていたのかもしれない。だからこそ、人一倍、他人の悲しみや辛さに敏感で、私の心の痛みにも気づいてくれていたのかもしれない。私たちは生まれた国も年齢も違うが、このホテルで生活のために働いているということだけは共通していた。だから、私がある日その境にみるみるとベッドメイクが上達すると、無条件で、ただただ笑顔で「Good!」と讃えてくれて嬉しい気持ちでいっぱいになった。しかし、よく考えてみると、グエンさんとのコミュニケーションはこれが初めてではなかった。実はバイトを始めた初日に、こんなやりとりがあった。私がリーダーから教えてもらったように、黙々と使用済みの寝具類の仕分けをしていると、後ろの部屋の扉が開き

「サービスの水をくれない？」

と東南アジア系の少し化粧の濃い女性が英語で話しかけてくることがあった。それを聞きつけたその隣の部屋の中華系の男性客も扉から顔を出して

「俺にもくれない？」

と声をかけられ、次々にそれが連鎖し、てんやわんやの状態になってしまったことがあった。彼らの訴えは何となく理解が出来たが、どうすれば良いか分からなかったので、グ

エンさんに相談した。すると、グエンさんは私の代わりに英語で

「何本欲しいの？」

と聞き、彼らの要求通りにサービスの水を涼しげな表情で、2本でも3本でも渡してしまっていた。私はこの光景を見て目を丸くした。いくらサービスの水とはいえ、リーダーに相談せず勝手にやって良かったのだろうか……。未だ答えは出ないが、そんな自由で少し破天荒なグエンさんが私は大好きだった。しかし、九月を迎えて車検代が溜まってきたのを機に、私はホテルのバイトを辞めた。本業が忙しくなったこともあるが、グエンさんがホテルのバイトを辞めてしまったことが大きかった。退職後に、彼女がどこで働いているかは分からなかった。しかし、英語と日本語の両方を話せるので

「もしかしたら、もっと時給の高いニセコのリゾート地に行ったのかもしれない」

と思った。いずれにしろ、元気で頑張っていてほしい。

ところで話が少々逸れるが、私がホテルで働いていて引かかっていたことがある。それは、スタッフがチェックアウトする日本人の観光客には「ありがとうございます」と言うのに対し、外国人の客だった場合は、誰もが無言だったことだ。私にはそれがどうも理解できずにいた。なぜ皆、何も言わないのだろうか？ 何語で話せば良いか分からないからか？ フロントの人間ではなく、清掃員だからか？ 日本人であろうが、外国人であろうが、このホテルを選び宿泊してくれたこと、そしてお金を支払ってくれたことは共通しているのに。そのため私は廊下で彼らとすれ違う際、難しい英語は話せなくても「Thank you」とか「Have a nice day!」と簡単な言葉を話すようにした。すると、最初は突然話しかけられて一瞬驚かれることも多々あったが、不思議と無視をされることはなく「Good bye!」とか「マタ、クルヨ」と笑顔で手を振りホテルを後にしていった。若い人とは違い、言葉になかなかすることができない高齢の方は拝み手をし、朗らかな笑みを浮かべてその場を後にすることもあった。皆、本当は言葉の壁があっても、交流を持ちたい気持ちは変わらないのかもしれない。そう強く感じる瞬間だった。日本の国際社会化や、グローバル化が叫ばれて、かなりの年月が経つが、やはりどこか日本は閉鎖的な感覚を持っているというのを、このひと月と少しのバイト体験からも肌でひしひしと感じ取った。現在は小生から学校の授業で英語教育を取り入れているが、本当の意味で国際人になるには、これは必要不可欠であると思うのだ。受験勉強のための英語ではなく、実際の生活で生きる英語を学ばなくてはならない。始めは片言でも良い、ボデイランゲージでも良い。なんなら恥をかいたって良いのだ。英語が通じなくて恥ずかしがる時代はもう終わったのだから。これから日本は、今以上に国際社会の渦に飲み込まれて行くのは必然で、彼らとの助け

合いが必要になっていくだろう。例えば、外国人が道端でお腹が痛くなっただけでうずくまっていたところを見かけたとき、私たちの助けが必要になるかもしれない。反対に同じシチュエーションで私たちが助けられるかもしれない。私がホテルの清掃のバイトで、グエンさんに助けってもらったように、今度は、私が彼らの困っているときに手を差し伸べられる存在になりたい。彼らともっとコミュニケーションが取れるようになりたい。そのため、この春からオンライン英会話で英語を学び直し

「もしもいつか再びグエンさんと同じ職場でバツタリ働くことになったら、流暢な英語でお礼の言葉を話してみたい」

と密かな願いを胸に抱いているのだ。